学園の問題

主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園の問題

【Ｎコード】
Ｎ７１６３Ｋ

【作者名】
主

【あらすじ】
主人公、渡利　亮輔が名門　「東南学園」にゆきそこで出会ったヒロイン蒼井　空と繰り広げられる。笑いあり少し下あり時に涙ありの物語です。
そして、最後にこの二人は・・・

登校

年は、２０３０年ちょうどきりがいい年の頃、俺は高校に向かっていた。この高校は、なんといってもすべてがすごい。なによりもすごいのが、その偏差値である。なんと、その偏差値７５．４％、もう桁外れである。なぜ、この学校を選んだかというと、なにより真面目だと思ったからであり。けっして、女の子に良い所プレーを見せようとはそんなことといっさい考えていない。学校の名前は『国立東南学園』といいこの学校は、まだ出来て今年で2年目だ。だから俺らの先輩は2年生だけとなる。

そんな頃いきなり　耳障り声がした。

「よー、　亮輔」

俺は迷惑そうに「なんでお前もいるんだ」と聞いた。

「そりゃ、俺も　東南に行くからだよ」

「は？」

俺は続けた。

「だから、どうしてお前もいるんだよ」

「おいおい、さっきからお前ていっているけど、俺はお前じゃなくて　一也という名前があるんだよ」

「分ったよ、かすや」

そしたらかすたは、俺の冗談にすぐ反応し「俺は、一也だと」いっていた。

「あー分かった、分かった。」

「んじゃ、話を戻すぞ」

俺はうなずいた。

「俺はなスポーツがうまいからなスポーツ推薦でうかったんだ」

なんだとこいつ、俺は勉強をして、苦労して入ったというのに、こいつはスポーツだけで入りやがったのか。

「ふ・ざ・け・ん・な――――――――」

俺は、ほえた心の底からほえた。
「おい、なんで怒っているんだよ。おいちょっと」
俺は見向きもせずにまっすぐ学校に向かった。
続く

登校（後書き）

はじめまして、今回から始めます、主と申します。
今回の、学園の問題で皆さんに好かれる作品になることを願っています。

出会い

はぁ～、やっと着いた。
「それにしても、広いなこの学校は」
まーそりゃそうだろう、なぜなら東京ドーム3個分の大きさだ。
どんだけでかいんだという話だ。下駄箱につくと、教師が紙を配っていた。ねーと、俺は・・・
「きゃ」
そんな時、俺の肩にぶつかった女子がそこにいた。
「すいませんでした」
彼女は、謝罪をしてすぐに紙をもらい走っていった。それに、しても「かわいいな～」思いだして見ると、髪は、ロングヘア・胸は、Eカップレベルで顔は、もう美人のレベルだな。
「うーんとで、俺のクラスは、1年五組か」
この学校では、一年生は三階と決まっている。ちなみに、二年生は、二階・三年生は一階である。
そして俺は、三階の学校の正面からみたら三階のいちばん右のクラスである。

俺はクラスについたが、やっぱり勉強をしている人が多いがそのなかには、寝てる人がいた。ふと、黒板を見ると、名前が書いてあった。俺は「あそこか」そう居眠りしている女子の隣だ。良く観るとよだれをたらしていることが分かる。そして極め付けに「ウインナー」と言っている。どういう寝言だ。
どんだけ、ウインナーが好きなんだと心の中で突っ込んだら、さっきの女子がいた。
「あ、さっきはどうもすいません」
「あ、いえいえ、あなたこそ大丈夫なんですか?」
「え、私の頭が悪いとでも」

「いや、そんなことは第一この学校に入っている時点で頭いいですよ。」
「じゃ、私のどこが大丈夫と・・・いうのですか？」
俺はすぐに訂正した。
「いや、けがしている所はないなだろうな～と」
そしたら、彼女は申し訳そうに話を続けた。
「すいませんでした。私、なんか質問されるとネガティブ思考が働いてしますのです。」
あーそういう事だったのか、て？どういう思考をしたらそうなるんだ。
「あ、すいません名前言ってませんでしたね？」
「あ、はい」
「私の名前は　可美村（かみむら）　楓（かえで）です。」
「あ、俺は渡利　亮輔といいます。」
「うーんなんだうるさいな～人が寝ているのに」
ふと見ると隣のウインナーと寝言をいった女子がいた。
「あ、おはよう空」
「おはよう、楓」
お互い挨拶をかわしているので、知り合いなんだろう。
そうこれが、俺達の出会いだ。
続く

出会い（後書き）

いやー、書くのも苦労しますな～。
疲れてしまいますよ。
しかし、今回が出会いの始まりです。
これからも、いろんなキャラクターが出てきますのでよろしく。

ＩＱテスト（前書き）

新学校、東南学院で新たのに出会った。可美村　楓と空という人物。
この後の話です。詳しくは、前の話で。

IQテスト

まー、そんな訳で話に戻るが・・・俺は軽く戸惑ったが軽くその空という女子に声をかけた。
「あーおはようございます」
「ん、あーおはよう」
あ、どうしようこの後につながる話がね～・・・あ、そうだフルネームを聞こう。そうだそうしよう。
俺は空さんに、「あのお名前はなんというのですか?」そうすると空さんは「蒼井　空」空さんは続けた。
「あ、私新しく部活作るから入らない。」
は、何をこの人は言いだすんだ。
「は～、部活ですか」
ため息をつきながら可美村さんが空さんに聞いた。
「え、だって暇だから。」
この人は暇で作るのか!
「あと、部活は放送部」
「「放送部」」
これは、俺と可美村さんがはもった声であるが、放送部なんてなんとも、すごいシンプルだ。可美村さんが聞いた。
「けど、どうして唐突にそんな事を考えたわけ。」
「だって、この学校まだ出来たばかりじゃない」
俺はうなずいた。
「そして、まだ離れた所に空き教室があるから、そこを使おうと思っているの」
俺は聞いた。
「えーと、でなんで俺まで」
まーこれは聞くのが当たり前だろ。
「あんたが身近にいたから、て名前なんだっけ?」

「名前は、渡利　亮輔てそんな適当でいいんですか？」
「いいの、いいの」
ほんとにいいのかわからない・・・

まーそんな事があったが、先生が来た。

「えーと、このクラスの担任をする。　釜重（かましげ）　良平（りょうへい）　といいます。」
釜重先生は続けて言った。
「えーと、ではあなたがたのＩＱを調べるためＩＱテストを行います。」
『エーーーーー』
そりゃそうだ、これが生徒の反応だ。
そうすると隣の空さんが、「ふーん変わってるわね」と小さな声で言っていた。
そうして、ＩＱテストが始まった。
・
・　・　・
・

よし、終わった。
以外と難しかったがまーなんとかなった。
隣の空さんを見ると、もうくたびれていた。
続く

ＩＱテスト（後書き）

次回、驚きの制度発表。

明日に続く・・・

ＩＱテストの内容は、公開出来たら番外編で書きます。

これからもよろしく。＾＾

ＩＱテスト問題（前書き）

テストの時の問題の一部です。
話は基本ありませんが、この問題が解けたらあなたのＩＱは、２００です。
ヒントは、犯人と地名です。

ＩＱテスト問題

※これは、物語の中での１部であり本編とは、前回の３話でしか、かかわりがありません。

ある会社で殺人事件が起こり、殺されたのはＷＭテレビ深夜の天気予報番組「おはよう！お天気一番」で気象予報士の渡辺さんだった！渡辺さんは自分が殺されるのを解ってたらしく、殺される前日に暗号入りの手紙を送ってきた！さあ暗号には犯人の名が犯人は誰？

今夜の天気

札幌くもり名古屋あめ秋田はれ　大坂あめ　仙台くもり広島くもり新潟あめ　高松はれ　前橋あめ　福岡くもり東京はれ　鹿児島はれ長野あめ　那覇はれ　〓全国的に南西の風〓

答え、犯人のことは、ほしって言うよねー。
星が見えるのは晴れ!!!つーことは秋田、高松、東京、鹿児島、
那覇これを南西から読むと・・・
なはかごしまたかまつとうきょうあきたこれじゃ意味不明・・・。
だから県庁所在地だけど県名と名前が違う那覇と高松を取り出して
南西から読むと・・・。
なはたかまつ!つまり・・・

犯人の名は高松!!!
難しいと思います。

ＩＱテスト問題（後書き）

次回

空「やっとシャバに来たぜ」
渡利「お前は、どこの族だ」
空「次回、『開始』海賊〇に私はなる」
渡利「やめなさい！！！！」

こんにちわ、主です。
今回から、キャラクター―に次回予告をしてもらいます。

応援よろしく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7163k/

学園の問題

2010年10月14日16時15分発行